

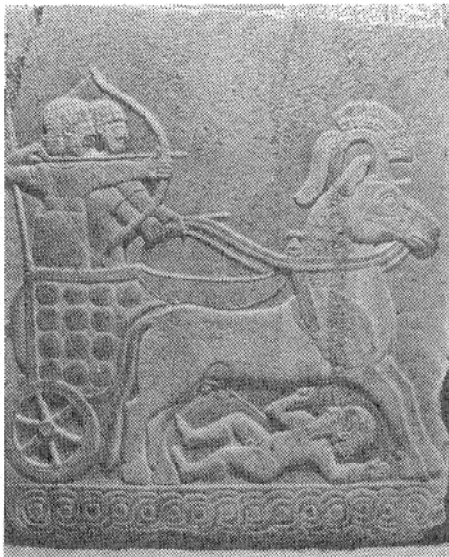
ヒッタイト幻想行



随筆

大平愛信*

今世紀に入り、ツタンカーメン（エジプト）、馬王推（中国）、シパン（ペルー）など古代の謎に迫る考古学上の大発見があいつづいているなかで、紀元前十数世紀に、鉄製武器と軽戦車という斬新な戦術で、古代オリエントに一大帝国を築いていたヒッタイト民族が、今世紀初頭、約3100年の長い眠りからさめ、歴史の表舞台に忽然とその勇姿をみせたドラマ程、私には魅惑的なものはない。



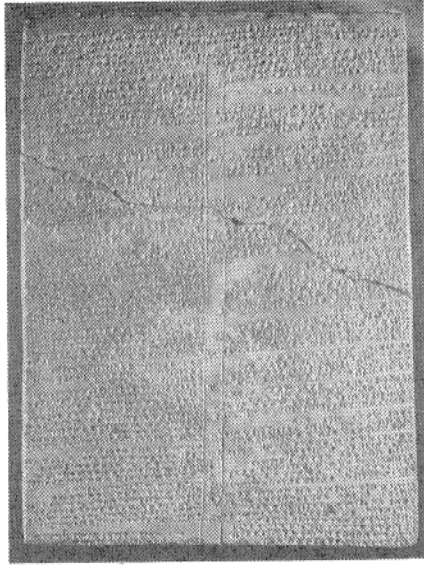
軽戦車

はじめに、ヒッタイトの華々しいデビューぶりを紹介する。今世紀初めには、ヒッタイト発見の萌しがあったが、1906年に、ドイツ・オリエント学会から派遣された、アッカド語学者であるフーゴー・ヴィンクラーが、アンカラの東、約200キロにある寒村ボアズキョイ（現在のボアズカレ）の発掘調査をおこない、1万枚を超える焼成粘土板を発見した。その粘土板（これ

をボアズキョイ文書という）のほとんどには、解読不能の楔形文字が刻まれていたが、幸いにも、そのなかにアッカド語で書かれた1枚の粘土板があった。それを解読したところ、その粘土板文書は、エジプトの第19王朝のラムセス二世から、ヒッタイトの王ハットゥシリ三世に宛てられた書簡であり、カデシュの大合戦（1286 B.C.）の後、両国間で交わされた平和条約に関するものであることが分った。そして、その条約文が、エジプトのカルナックのアーメン神殿の壁面に刻まれたものと、ほぼ同じものであることを突き止めた。このようにして、長年アナトリア高原に眠り続けていた、幻のヒッタイト帝国が目覚めたのである。1916年に、チェコの言語学者B・フロズニーにより、ついにボアズキョイ文書が解読され、同時に、それが印欧語系の言語で書かれていることが明らかにされた。その後の精力的な考古学的研究により、ヒッタイト民族が、独占的な鉄製武器の大量使用と6頭立の軽戦車戦術により、紀元前1720年以来、当時の強国であったエジプトやバビロンをも脅かす一大強国を築いていたことが、クローズ・アップされてきた。このように、一枚の粘土板を介しての、歴史の舞台への劇的な登場ぶりや現代機械文明の礎となった鉄器文化の創始(?)といった、人類史上稀にみる大役を見事に果たしたというだけで、ヒッタイトは十分に魅力的な存在である。が、私は、古代をうかがう旅は、それはまた、未来をしる旅であるという意味で長い、苦しい大移動のなかで、行く先々で邂逅した、自分達よりも秀れた新しい文化にとまどいながらも、それを積極的に吸収しつつ、自分達の文化をつくっていった、泥臭いヒッタイトの成長の過程に、むしろ限らない愛着をおぼえるのである。

周知のように、古代オリエントの歴史は、印

*大平愛信 (Yoshinobu ODAIRA), (会社技術顧問) 大阪大学工学部名誉教授, 工学博士, 応用精密化学



ボアズキョイ文書

欧語系民族の、内陸ユーラシア乾燥地帯からの、移動の歴史ともいえる。ヒッタイト民族のルーツである印欧語系のトラキア族は、黒海の北のバルカン半島東部に住んでいたが、自然環境の変化か、または、異民族による圧力のためか、紀元前2000年前から南下をはじめ、コーカサス山脈の西側を通り、小アジアに向っていた。

小アジア（アナトリア）は、アンタルヤ付近で、1万年以前の旧人の使用した洞窟が発見されているように、早くから開けており、紀元前6500年の集落址が発見された、チャタル・フユック遺跡（コンヤの近く）の遺構や遺物は、完成度の高い農耕・牧畜文明が、すでに存在していたことを示している。紀元前2500年頃になると、エーゲ海沿岸のトロイでは、地中海人による青銅器時代（トロイ文化）が成熟化しており、一方、東部アナトリアには、フルリ人やミタンニ人などの原地人が住んでいたが、そこが恵まれた鉱産地であったため、アッカド王朝からウル第3王朝（2400～2050 B. C.）にかけて、当時の強国メソポタミアの交易植民地となっていた。そして、中央アナトリアでは、原住民であるハッティが、クズルウルマック川（トルコ語で赤い川の意）の渓谷に、トロイ文化とは全く無関係に、高度の青銅器文化を形成していた。

このような小アジアの状況のなかで、東部アナトリアに移動（侵入）してきたヒッタイトは、原地人を征服するとともに、原地人の使用して

いたロバの曳く馬車を、戦略的兵器として、積極的に活用した。また、そこでメソポタミア系の楔形文字に出会い、彼等の印欧語を文字化するために、ヒッタイト文字といわれる独特の象形文字を考案した。紀元前1800年頃には、中部アナトリアに移動し、背後はポントス山脈とタウルス山脈に守られ、クズルウルマック川を前面の濠とする、海拔900メートルのハッティ国の首都である、天然城砦のハットウシャシュ（ハッティの住むところの意）を攻略し、これをボアズキョイ（トルコ語で狭い谷間の村の意）と改め、ヒッタイト帝国の首都とした。

彼等は、きわめて信心深く、メソポタミアの宗教の影響をうけて、擬人化された太陽神と暴風神を主神とする守護神を信じていた。（その神々が、先の尖った三角帽子をかぶり、右手に斧をかかえた姿は、ご愛嬌ものである）。なお、ヒッタイト王は、祭司をも兼ねていたため、王宮よりも神殿が立派であった。



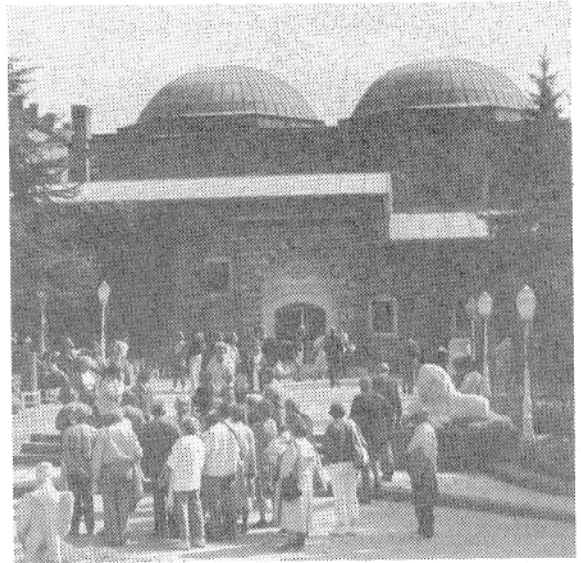
ヒッタイトの12人の神々

さて、自然科学者である私共が、恐らく最も注目している鉄の問題であるが、ボアズキョイ近くのアランジャホユックの前期青銅器時代（2500～2000 B. C.）の王墓遺跡から、短剣（鞘は黄金）やスタンダードなど4点の鉄器が、1935年に発掘された。これらの化学分析により、これら鉄器にはニッケルが5.08～4.03%含まれていたことから、人工鉄ではなく、自然鉄（隕鉄）であることが分った。しかし、そこで鉄滓や製鉄跡が発見されているので、ハッティを含むプロトヒッタイトが、鍛冶技術のみならず、製鉄技術をも持っていた可能性が高いようであ

る。鉄を制するものが国を制する例は、枚挙にいとまがない。昭和43年8月、稲荷山古墳（埼玉県行田市）から、一本の鉄剣が発見されたが、その鉄剣の錆の化学分析結果が、大和朝廷に—それまでの大和地方からではなく—北陸からの天皇（継体）が登場する5世紀の謎を、解く重要な鍵となっている例など好個なものであろう。したがって、ヒッタイトにとっては、製鉄技術の独占が、最高の重要事項であったにちがいない。国家の命運に係わる機密の保持のために、天然の要塞首都ボアズキョイ周辺の険しい地勢が必要だったのだろう。

しかし、その帝国崩壊の原因に、王位継承に絡む内紛説、経済的破綻説、また、アドリア海などからの海上民族の侵入説などの諸説のあるなかで、紀元前1180年に、ヒッタイト帝国は、540年間の栄光の幕をとじた。滅亡とともに、タウルス山脈の南に移動した一集団のみが、わずかに旧約聖書にヘテ人として名を留めているに過ぎない。ヒッタイトの、歴史の裏側への移行とともに解放された製鉄技術は、次第に、広く世界に拡散していった。ちなみに、ようやく鉄器時代に入ったオリентでは、鉄製武器をもったセム族が、強大なアッシリヤ帝国（746～612B. C.）を建設した。また、古代ギリシャ人の一派であるドーリア人の、ギリシャのペロポネソス半島への侵入時に、鉄器を伴っていたとされている。わが国の鉄器と関係の深い中国の鉄器時代は、紀元前500年ぐらいから始まったようである。

「一見は百聞に如かず」と、退官まもない4月中旬に、成田—パリーイスタンブール—アンカラという空路で、目的地であるトルコ共和国の首都アンカラに到着した私は、一路、旧市街にあるアナトリア文明博物館に向った。そこは最近まで考古学博物館と呼ばれていたところでビザンチン時代の城壁が残る小高い丘の上の、白テント張りの野趣豊かな村のバザールの近くにあった。もともと、隊商宿（キャラバン・サライ）として建てられ、15世紀に貴金属市場になったものが、博物館に改造されただけに、外観はともかく、内部は特に石造美術品室などは、冷氣漂う巨大な洞窟のようなたたずまいであっ



アナトリア文明博物館

た。この博物館には、その名の示すとおり、アナトリア地方からの数多くの出土品が、原始、新石器、青銅器、アッシリア植民地、ヒッタイトと、各時代順に展示されていた。特に、ヒッタイトゆかりのコレクションが有名で、ヒッタイト博物館という人もあるくらいである。

ゆったりと配置されたガラスケースの中に、さりげなく飾られたヒッタイト遺物のなかで、粘土製の王の印章やヒッタイトの主神である暴風神の象徴である牡牛の像、また、青銅や象牙でつくられた神々の彫像や金製の認印など、いずれも精巧かつ優美な作品で、高い芸術性がうかがえた。しかし、何と云っても、私の目的が目的だけに、ヒッタイト復活のきっかけとなった、楔形文字のヒッタイト語が刻まれた、ボアズキョイ文書の粘土板（高さ26.5センチ）、ボアズキョイ遺跡の王門の入口にあった、鋭い鉄製の拳棒をもった戦士の像の、石灰石製のレリーフ（高さ225センチ）、それに玄武岩製の軽戦車のレリーフ（高さ175センチ）程、強くひきつけたものはなかった。念願のヒッタイトとの対面を果たした私は、この9月に再び訪れるであろう博物館を辞し、勇者ヒッタイトのつわものどもの夢の跡をたずねるべく、アナトリア高原の旅にでた。アナトリアという地名は、太陽の昇る土地という、古代ギリシャ語からきただけに、胸はずます明るい旅であったはずなのに、どうしたことなのだろうか。国破れて、山河あ

り、というではないか。少くとも、製鉄に必要な燃料（薪）を供給した、うつ蒼たる大森林が山を覆っていたはずではなかったのか。土埃をまきあげながら、けだるそうに走り続けるバスからの展望は、異様なまでの濃赤色の山肌、ごろごろと転がる奇怪な形をした岩石などなど、とても自然の造形とは思えない、おどろ、おどろの連続である。こういうところを、ダイナマイトでも蒔けば、生えてきそうな土地というのだろう。三角帽を被ったヒッタイトの神々の、怨霊がさまようような、荒涼たる不毛の地を、600キロ走破し、高原の旅の中継点コンヤに近づく頃には、このおどろな舞台こそ、悲劇的なヒッタイトにふさわしい挽歌ではないかと考えだしていた。



ヒッタイト戦士の像

アナトリアの旅は、高地特有の寒暑の差の激しいステップ気候の上、水は質、量とも劣悪でとても快適とはいえないが、折々に宿泊した、整備途上のホテルの前には、不思議とジャミイ（モスク）があり、朝まだ暗き午前4時半に、そのミナレット（尖塔）からの朗々たるエザン（礼拝への誘い）に、たたき起こされ、政教分離とはいえ、国民の98%がイスラム教徒であるという現実を、毎朝しらされるのも結構なことであった。そして、行く先々で出会ったアナト

リアの人達は、黒い髪、浅黒い肌、中背、広い胸巾、濃い髭といった風貌で、誇り高き生粋のトルコ民族らしい毅然たる応対の中にも、優しい心情が溢れでていて、とても印象的であった。

2600キロのバス旅を終え、トルコ第一の都市イスタンブールに、9日ぶりに帰った私は、今回の旅の第2の目的である、ヒッタイトに関する叢書と、それを英語を介して読むために必要な、トルコ語と英語の対訳辞書を購入するために、銀座通りといわれる、イスティクラル通りに向った。その通りのソ聯領事館の傍に、洋書もあつかう大きな本屋が集っているからである。対訳辞書は簡単に入手できたが、肝心の叢書のほうは、全く発刊されていないとのことだった。店主たちの、にべない返事をきいた時は、さすがにがっかりしたが、わずか2週間の旅ではあったが、この国のあれこれを見聞するうちに、ハユル（ノー）の返事が返ってくるような悪い予感がしていたので、すぐ気を取り戻した私は、タキシム広場近くのチャイハネ（喫茶店）で、幻のヒッタイトをひたすら追い求めた旅の疲れをいやした。

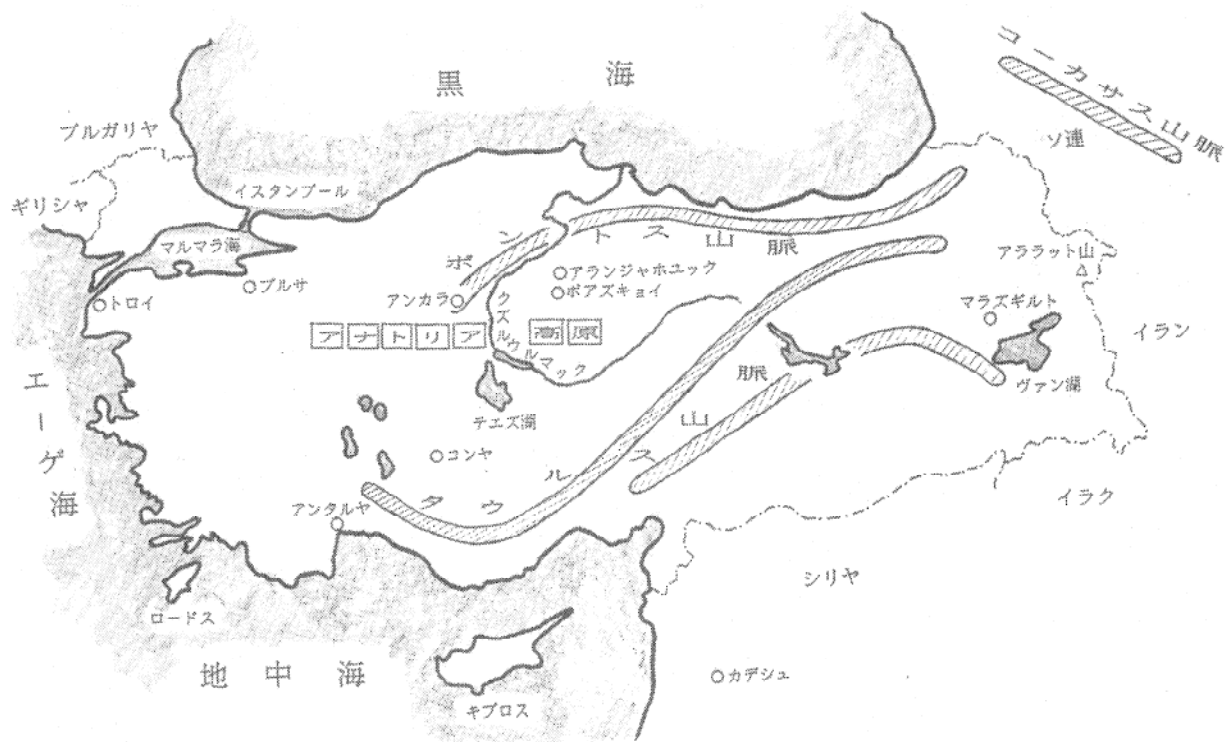
どんな民族でも、自分たちのアイデンティティーのよりどころを、古い根源に求めるのは、きわめて自然なことである。問題は、古い根源に何を選擇するかによって、その民族の存在意義が全く変ってしまうことだ。世界第一次大戦後、近代化にたちおくれたため、列強に半植民地化された苦い経験をもつこの国は、ケマル・アタチュルクによるトルコ共和国の樹立とともに、政教分離、義務教育の施行、婦人参政権の確立などから、男性のトルコ帽および婦人のチャドルの廃止にいたる、さまざまな抜本的改革を試みてきた。その近代化政策の一つとして、それまでのイスラム史とオスマン・トルコの歴史に限られていた歴史教育を廃止し、トルコ語系民族の一つで、アルタイ山脈の南方に住んでいた、突厥（Turkの音訳）の伊利可汗が、モンゴル高原を支配していた柔然を撃破し、建国した552年をもって、トルコ国家の始まりと定めた後は、もう一本道である。アジア草原地帯からの大移動。イスラム圏のアラル海付近に達してのイスラム化。シルクロードを通して、バ

クダット攻略 (1058 A.C.)。そして、セルジューク・トルコ王朝の誕生。小アジアに進出。

ヴァン湖近くのマラズギルトで東ローマ帝国軍撃破 (1077 A.C.)。(このとき、スルタンによって作られた、赤地に星と三日月を白く染めぬいた軍旗が、現トルコの国旗になっている)。ルーム朝セルジュークのオスマン・トルコ帝国への交代……といったトルコ民族の栄光ある1500年の歴史が、小学校教育にもちこまれて、実に60年近くが経過しているのである。その近代化も遅々として進まない現状では、トルコ語系民族ではなく、印欧語系民族の、それも、先史時代のヒッタイトが、一般教育の場で認知されな

いことは、容易に理解できる。

しかし、「歴史は書きかえられる」という有名な言葉があることを知っている。愛すべきこの国に、いつの日か、心のゆとりが生まれたとき、国威宣揚の歴史が、1万年の起伏に富むドラマに彩られた、小アジア中心の歴史に、書きかえられることもあるのではなかろうか。その時には、ヒッタイトが、再び歴史の舞台に、華々しく復活してくるだろう。そして、いずれまた、表舞台から姿をけしていくのだろう。なぜなら、それが、ヒッタイトの定められた宿命のような気がするからである。



アナトリア高原(トルコ共和国)